

ブロンテ姉妹初期作品研究 ()

シャーロット・ブロンテと絵画的描写力

杉村 藍

On the Early Works of the Brontë Sisters (): Charlotte Brontë and her Pictorial Description

Ai SUGIMURA

はじめに

ブロンテ姉妹(Charlotte Brontë, 1816-55, Emily Brontë, 1818-48, Anne Brontë, 1820-49)が作家として本格的な小説作品を発表するようになるずっと以前から、大量の物語や詩などを書き溜めていたことはよく知られている。こうした初期作品群が、姉妹が作家となるための重要な素地となったことはいうまでもない。後の小説作品の研究のうえでも、これらの習作がもつ意義は大きい。そうした初期作品の成立過程や後の小説との関連については、拙論「ブロンテ姉妹初期作品研究() シャーロット・ブロンテを中心に」¹で書いたとおりである。

そのなかでも触れているが、シャーロット・ブロンテの文章には絵画的な要素が多分にあり、実際初期作品のなかには文章だけではなくそれに合わせた挿絵が残っているものがある。彼女が作家となる以前、職業画家になろうと真剣に考えていたことはよく知られており、そうした絵画への強い傾倒や造詣の深さが文章作法にも何らかの影響を与えていたということは大いに考えられる。彼女の絵画的な描写力に関しては小説家として成功した際にも多くの批評家によって指摘されており、これが小説家シャーロット・ブロンテの大きな特質の一つであることはまちがいない。そこで小論では、ブロンテ姉妹の初期作品のなかで、特にシャーロット・ブロンテの場合を例に取りながら、彼女の執筆した作品と絵画との関連について考えてみたい。

絵画との関連

シャーロットの初期作品と絵画との関連については、ブロンテきょうだいの絵画作品についてまとめた大著、クリスティーン・アレグザンダー(Christine Alexander)とジェイン・セラーズ(Jane Sellars)共編の*The art of the Brontës*でも触れられている。

A comparison between the drawings and early writings reveals that, for Charlotte, the composition of word and visual image went hand in hand....

This association between the pictorial image and the written text in the juvenilia is translated into Charlotte's mature writing in a variety of ways.²

このようにアレグザンダーは、シャーロットの場合、絵と初期作品とは互いに関連しあいなが

ら作業が進められ、それは後に彼女が小説家となってもさまざまな形で同じように続けられたと述べているが、これは実際にシャーロットの作品を見れば頷ける。

例えば、作家としてのシャーロット・ブロンテのもっとも顕著な特徴の一つとして、彼女の描写力、絵画的な筆致が挙げられる。彼女が作家として広く知られるようになった出版第二作『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)は、「ジェイン・エア・フィーバー」(*Jane Eyre fever*)と熱病にも喩えられるほど大ヒットし、数多くの書評が新聞・雑誌に掲載された。そのなかには作品に対して肯定的なものも否定的なものもさまざまであったが、そのような肯定、否定いずれの批評においても変わることなく高く評価されていた点は、彼女の描写力であった。

『ジェイン・エア』批評でシャーロットの絵画的描写力を評価した批評としては、1847年に *Fraser's Magazine* 12月号に掲載されたジョージ・ヘンリ・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) の匿名の批評が知られているが、³ そのほかにも多くの批評家がこの点を指摘している。わたしが見た限りでは、シャーロットの描写力について最初に触れているのは1847年11月6日付の *Spectator* に掲載された匿名による書評である。この書評は『ジェイン・エア』出版後におそらくシャーロットが初めて受けた徹底した酷評であった。しかしそうしたなかでも、“The book [*Jane Eyre*], however, displays considerable skill in the plan, and great power, but rather shown in the writing than the matter; and this vigour sustains a species of interest to the last”⁴ と批評家はこの小説の書き方がもつ力を評価し、これが最後まで興味を支えているとしている。この指摘は書評全体の色調を反映して否定的な表現になってはいるが、そのような酷評においてさえ評価されうる力量のある部分として、やはりシャーロットの描写力は見逃せないものであったといえる。

そのほかにも、1847年11月27日付の *Examiner* に匿名で掲載されたA. W. フォンブランク (Albany William Fonblanque, 1793-1872) の書評では、シャーロットの描写力に関して“graphic”, “portraiture” など絵画に関連した言葉が用いられている。⁵ 『ジェイン・エア』を酷評し、売り上げにまで影響を与えたエリザベス・リグビー (Elizabeth Rigby, 1809-93) の匿名批評でさえ、自然描写における優れた才能を認めているし、⁶ 『ジェイン・エア』がフランスの雑誌に取り上げられた際も、光の描写に関してレンブラント (Rembrandt Harmenszoon van Rijn, 1606-69) やロイスダール (Jacob van Ruisdael, c.1628-82) を凌ぐと高く評価されている。⁷

このように、海外の批評家も含め、作品に対して否定的な見解を示した場合でさえ、批評家たちは文壇に登場した新星カラー・ベル (シャーロット・ブロンテの筆名) の優れた資質として (時に絵画的な) 描写力を挙げていたのである。彼女の作品に対する評価は、時代や批評方法の変遷に伴ってさまざまに変化しているが、しかしこの描写力に関する評価は『ジェイン・エア』が出版されてから今日まで揺るぎない。⁸ すなわち、シャーロットのもつ絵画的な描写力は、出版当初から時代を経ても評価が変わることのない、非常に特徴的でまた優れた資質であるということができるであろう。こうした特質が、彼女が幼いころからつねに親しんできた絵画や、絵と平行して書き綴った初期作品と深い関係があることはアレグザンダーも指摘しているとおりであり、非常に興味ぶかい点である。シャーロットと絵画との関連を考えることは、作家としての彼女の特質を見極めることでもあるといえる。

しかしながら、そのためには膨大な研究が必要となってくる。そこで以下では、シャーロット・ブロンテの初期作品と絵画との関わりを探索するためにどのような研究が必要となるのか、なぜ必要であるのか、またそこからどのような成果を期待できるのかといった研究課題につい

て、それぞれまとめてみたい。

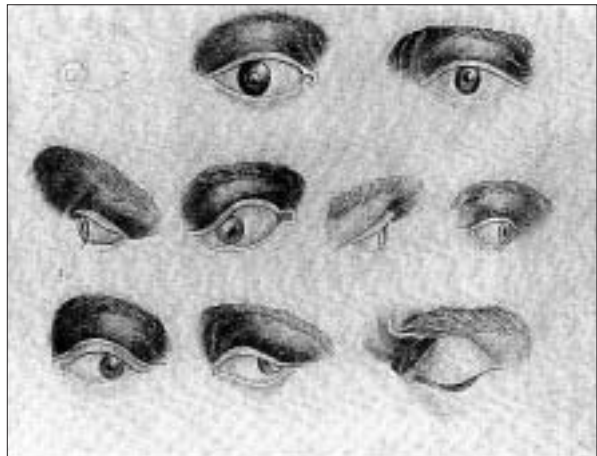
歴史的背景

初期作品を初めとするシャーロット・ブロンテの文学作品と絵画との関わりを考える際、その背景となる歴史的状況についても把握しておく必要がある。すなわち、シャーロットが生きた19世紀イギリスの社会状況、思想、自然観、女性観などである。これらは分野によっては一見芸術活動とは関連が薄いように思われるかもしれないが、実際にはさまざまな形で結びつきがあり、影響を与えあっているものである。ここでは特に美術界と関連の深いものについて挙げてみたい。

i) 骨相学 (phrenology) 人相学 (physiognomy)

シャーロットの文学作品における人物描写には、外見からその人物の性格をも読み取るという特徴があり、初期作品においてもかなり早い段階から現れているものであるが、これにはこの時代に流行した骨相学や人相学の影響を指摘できる。これは人の骨格や人相からその人物の性格や才能、運命などを判断するという似非科学であるが、これらがこの時代にもはやされた背景には、その前世紀の産業革命による農村からの人口流出と、その結果としての都市人口の急増が影響している。⁹ 互いに知らぬ者同士が寄せ集まって暮らす都会で、相手がどのような人物であるかを外見から「読み取る」術が必要だったのである。¹⁰

こうした視覚的な情報の読み取りは、当時の絵画と文学の間に密接なつながりを生み出した。ピーター・コンラッド (Peter Conrad) によると、ヴィクトリア朝の人々は絵画は眺められるものではなく読み解かれるべきものであると主張していたという。そして小説家たちもまた、文学の世界において人の表情を解読したり顔の骨格を解釈したりといった、人々の顔を読む手段を開発して行った。¹¹ シャーロットが絵のマニュアルから人間の目、鼻、耳をいくつもまとめて模写したものが残っているが、これらには当時の人相学や骨相学の影響が感じられる。



Charlotte Brontë, "Study of eyes" (29 January 1831)

ii) 博物学

この時代はまた、博物学が発達した時代でもあった。1830年代には中流階級の家庭には必ずといってよいくらい博物図譜があったといわれ、これを当時の女性たちは嗜みの一つとして盛んに模写した。¹² シャーロットもロウ・ヘッド在学中を中心に、さまざまな果物や花の絵を模写している。興味ぶかいのは、こうした博物学的なテーマで描いたもののほとんどが、実物の写生ではなく、それらを描いた絵をさらに模写している点である。シャーロットの残した絵が、この博物学的な主題のものも含め三分の一ほどが模写であったことは、次に述べる女子教育の考え方や、当時の絵画教育のあり方と深い関わりをもっている。

iii) 女性教育

前項で述べたように、当時の女性の絵画との関わり方が、ほとんど模写に集中していたという点は注目に値する。19世紀の女性作家、ミセス・エリス (Sarah Stickney Ellis, 1812-72) はいわゆる “conduct guide” も執筆していたが、彼女の著書 *The Daughters of England: Their Position in Society, character, and Responsibilities* (1842) には、芸術家としての生活はあまりにも困難が多いため、女性には不向きであるという記述がある。当時、女性にとって絵は芸術作品として厳しく追及していくものではなく、あくまで嗜みの一つとしてきれいに模写するものであったのである。¹³ また当時、絵の具を用いた絵が、構成や色使いから刺繍などの針仕事を補助するものとみなされていたことも、¹⁴ シャーロットら姉妹が熱心に絵画に取り組む環境への妨げにはならなかったであろう。このように、シャーロットの絵画との関わりには、当時の女性教育や女性観も影響を与えているのである。

iv) 絵画教育

女性教育における絵画は模写を前提としたものであったが、当時の絵画教育もまた、まず模写をその基本としていた。シャーロットたちが受けた教育もその例外ではない。アレグザンダーが “...we learn that from the beginning of their [the Brontës'] education, the children's notion of 'correct' art was one of copying”¹⁵ と述べているように、シャーロットがロウ・ヘッド学校時代に描いた絵を見ても模写が多く、学校においても絵画教育はやはり模写が中心となっていたことがわかる。こうした伝統的な教育を受けることにより、また当時の版画を模写することによって、シャーロットの絵は19世紀の絵画のあり方を着実に引き継いでいったように思われる。また、このころの絵画教育についてより具体的に知るために、当時の絵画用のマニュアルを見ておく必要があるであろう。

v) ピクチャレスク (picturesque)

19世紀イギリス社会全般との関わりはもちろんであるが、当時の美術界との関連には特に注目しなければならない。18世紀末に盛んになったピクチャレスクという、荒々しく不規則で厳粛な自然美はその後約半世紀にわたって流行し、ちょうどブロンテたちの時代と重なっている。¹⁶ 彼女らが模写した版画やマニュアルのなかにもそうしたピクチャレスクな主題を扱ったものがある。

vi) スチール・メゾティント (steel mezzotint)

流行した固有の美意識といった抽象的なもののほかに、技術的な側面においてもこの時代には画期的な革新があった。1820年に、それまでの銅に代わってスチールを用いるメゾティント技法が出現したことで版画が安価で入手しやすくなり、絵画はこの版画という形で広く大衆に親しまれるようになった。ブロンテたちに大きな影響を与えたとされるジョン・マーティン (John Martin, 1789-1854) の作品が、ハワースの司祭館に少なくとも3枚あったが、これらはいずれもメゾティント版画であった。¹⁷ 少女時代のシャーロットはさまざまな画家や絵画作品に関して詳しくあったと言われているが、大都会から遠くはなれ、また一司祭にすぎない父パトリックが名画を購入することなどあるはずもなく、ロンドンへ行くまでの彼女の知識は主に雑誌を読んだり名画を基にした版画を見ることによって得られたものであった。また、彼女が残している絵の多くが版画を模写したものであること自体、彼女がいかにもこの時代の版画文化に親しんでいたかを裏づける何よりの証拠である。このように版画を入手しやすい時代に生まれたことは、シャーロットと絵画との関係を考えるうえで非常に重要である。

vii) 年鑑 (Annual)

この時代に流行したものに、「年鑑」と呼ばれる本があった。19世紀初頭に毎年出版されていた装丁の美しい贈り物用の本のことである。ルドルフ・アッカーマン (Rudolph Ackerman) が1823年に出版した*Forget-Me-Not*が最初のものといわれ、これに続いて*Friendship's Offering* (from 1824), *The Literary Souvenir* (from 1825), *The Amulet* (from 1826)そして*The Keepsake* (from 1828)といった年鑑が次々と出版された。詩や物語などと一緒に美しい版画がつけられており、絹や型押しした革などで豪華に装丁され、クリスマス・ギフトの市場を賑わせた。この年鑑で多用された版画は、先に触れたスチール・メゾティントを用いたものであった。¹⁸

シャーロットが、後に述べるバイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の美人画やマーティン、ビューイク (Thomas Bewick, 1753-1828) らの作品に触れたのは、主にこの年鑑の挿絵を通してであった。その意味では、年鑑は彼女の視覚芸術に関してもっとも直接的な、そして重要な媒体であったといえる。ジェラン (Winifred Gerin) は年鑑の意義、特にシャーロットにとっての重要性について次のように述べている。

The pictorial aspect of this literature first reached the young Brontës through the new medium of the 'Annuals', whose engravings ... or 'embellishments' as they were called ... supplied a real craving in Charlotte's nature. She was, it must be remembered in passing, more sensitive to the plastic arts than her sisters and the importance to her evolution of just such a stimulus as these romantic engravings cannot be over-estimated.¹⁹

年鑑の刊行は、スチール・メゾティントの技法の開発と無関係ではない。こうした時代のさまざまな要素と絡み合いながら、シャーロットの美意識が、そして文学における描写力が形作られていったのである。

そのほかにも、19世紀の美意識や美術界の状況について、同時代の美術評論家、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の *Modern Painters* (1843, 46, 56, 60) や *The Seven Lamps of Architecture* (1849), *The Stones of Venice* (1851) が参考になるかもしれない。これらは時期的にシャーロットの初期作品に直接影響を与えているわけではないが、当時の美意識を知る手がかりにはなる。これらの作品は後にシャーロットが実際に読み、その思想を好んでいたと言われるものである。また、当時シャーロットがどのような画材を用いていたかなども、時代との関連で興味のあるところである。

以上のように、19世紀イギリスの時代背景を踏まえておくことは、直接、間接にシャーロットの絵画への影響を明らかにしていくために必要であることがわかるであろう。そして、ヨークシャーの寒村に生まれ育ち、外界の文化と接する機会が非常に限られた、特殊な環境に置かれていたかのような印象のあるブロンテ姉妹であるが、こうして絵画という視点から見た場合、少なくともシャーロットに関しては非常に時代の影響を色濃く被っていることが窺える。絵画を通して見えてくる彼女は、紛れもないヴィクトリア朝人の一人である。²⁰

伝記的研究

シャーロット・ブロンテの初期作品と絵との関連を考える際、彼女の伝記的な研究もまた、

不可欠なものである。どのような環境で、どのように絵画に親しんでいたかを把握しておくことは、それが後に文学といかにして結びついていったかを考えるために大切な手がかりの一つとなるからである。

シャーロットが絵を描いていることについての最初の記述は、彼女自身の手紙に残されている。これ以前にもすでに絵を描いていたが、記録として現在入手できるもっとも古いものである。

... , Branwell has taken two sketches from nature, & Emily Anne & myself have likewise each of us drawn a piece from some views of the lakes which Mr Fenell brought with him from Westmoreland, the whole of these he intends keeping ²¹

これは1829年9月、シャーロットが弟や妹たちとともに親戚のジョン・フェネル(John Fennell, 1762-1841)の家を訪ねていた時に父宛に書かれた手紙で、現存するシャーロットの手紙としてももっとも古いものである。この時シャーロットは13歳、ブランウェル12歳、エミリ11歳、そして末妹のアンは9歳であった。初期作品はこのころすでに書き始められている。

ここでシャーロットは、フェネルがウェストモアランド(イングランド北西部の旧州)から持ち帰った湖の景色を描いたと書いている。すなわち、彼女たちの描いたものは模写だったのである。手紙にはこの引用部分の前に“we have spent our time...reading, working [needlework], and learning our lessons...”とあり、読書や針仕事と同様、模写が当時の女子教育の一部をなしていたことが窺える。興味ぶかいのは、少女たちが模写をしている一方で、男の子のブランウェルだけは写生をしている点である。少女たちが全員寄宿学校での教育を経験しているのに対し、彼だけは父親から直接教育を受けており、こうしたところにも当時の男性中心の家父長制社会の影響を読み取ることができる。

伝記的研究からは、シャーロットが受けた絵画教育がどのようなものであったかを知ることでもある。ブロンテ家の子どもたちに絵を教えた教師としては、トマス・プラマー(Thomas Plummer)、ジョン・ブラッドレー(John Bradley, 1787-1844)、そしてウィリアム・ロビンソン(William Robinson, 1799-1837)の3人が知られている。そのほかにもシャーロットはカウアン・ブリッジやロウ・ヘッド、ブリュッセル留学中にエジェ塾でそれぞれ絵を学んでおり、彼女がこうした絵画教育において誰から、何を、どのように学んだかについて、確認していくことができるであろう。

また、シャーロットと絵画との関係については、彼女の友人の証言もある。

She used to draw much better, and more quickly, than anything we had seen before, and knew much about celebrated pictures and painters. Whenever an opportunity offered of examining a picture or cut of any kind, she went over it piecemeal, with her eyes close to the paper, looking so long that we used to ask her “what she saw in it.” She could always see plenty, and explained it very well.²²

これはロウ・ヘッド時代のシャーロットについての回想で、1831年、15歳ころのことである。すでになりに巧みに絵を描き、描くだけでなくその方面に関する知識も豊富だったことがわ

かる。絵画の観察、すなわち「読み」に関してずば抜けていた様子も窺える。

版画や雑誌など、絵画に触れるのは二次的な媒体を通してではあったが、彼女が絵画に並々ならぬ情熱を持ち、知識も豊富だったことは、すでに学校入学以前、13歳になるかならない時に、“list of painters whose works I wish to see”として“Guido Reni, Julio Romano, Titian, Raphael, Michael Angelo, Correggio, Annibal Caracci, Leonardo da Vinci, Fra Bartolomeo, Carlo Cignani, Vandyke, Rubens, Bartolomeo Ramerghi”¹⁸³のような画家の名前を列挙しているところからもわかるであろう。

シャーロットの絵画に対する情熱は単なる趣味を超え、彼女は職業画家になることを真剣に考えていた。1834年にリーズで開かれたThe Royal Northern Society for the Encouragement of the Fine Arts という展覧会に、“Bolton Abbey”(c. May 1834)と“Kirkstall Abbey”(c. May 1834)という鉛筆画を2点出品しているのである。この展覧会にはターナー(Joseph Mallord William Turner, 1775-1851)のような巨匠の作品も展示されていた。カタログによるとシャーロットの作品は“for sale”と買い取りにも応じる意向が示されており、²⁴彼女が絵画制作を職業に結びつけたいと考えていたことを窺わせる。

直接的な影響

これまで、時代背景や伝記的事実など、間接的にシャーロット・ブロンテの絵画と関わりのある要素を見てきたが、では彼女の絵に直接的に影響を与えたものにはどのようなものがあるのでしょうか。アレグザンダーは視覚的芸術という点でブロンテたちにもっとも大きな影響を与えた人物として、バイロン、ジョン・マーティン、トマス・ピューイクの3人を挙げている。そこで次に、シャーロットの絵に影響を与えたこの三人を中心に考えてみたい。

i) バイロン

バイロンに関しては、1834年7月4日付のエレン・ナッシー(Ellen Nussey, 1817-97)宛の手紙に書かれた読書指南のリストのなかにも一流の詩人として名前が挙げられている。

If you like poetry, let it be first-rate; Milton, Shakespeare, Thomson, Goldsmith, Pope(if you will, though I don't admire him), Scott, Byron, Campbell, Wordsworth, and Southey. Now don't be startled at the names of Shakespeare and Byron. Both these were great men, and their works are like themselves.²⁵

これを読むと、シャーロットがシェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)と並んでバイロンを偉大な詩人とみなし、また彼の作品をいろいろと読んでいたことがわかる。父パトリックはバイロン作品集を所蔵していた。彼女の小説におけるバイロンの影響は早くから指摘されており、例えば『ジェイン・エア』に登場するエドワード・ロチェスターの人物創造には、ヨーロッパ大陸での放蕩生活や数々の愛人などにそれを見ることができる。

しかし、あくまでバイロンは詩人であり、絵における彼の影響は、彼の詩作品や伝記にインスピレーションを受けて描かれた絵画を版刻した版画によるものであった。これらの版画は、*Finden's Illustrations to the Life and Works of Lord Byron* 3 vols.(London: John Murray, 1833-4), *Finden's Landscape and Portrait Illustrations to the Life and Works of Lord Byron*(London: John Murray, 1834), *The Poetical Works of Lord Byron*, 8 vols.(London:



“English Lady”(15 October 1834)

John Murray, 1839)という形で出版されていた。ブロンテ家がこうした本を所有していたかは疑問であるが、シャーロットは少なくとも接する機会があったようで、これらに収められている挿絵のなかから“Santa Mauna”(23 September 1833)、“Geneva”(23 August 1834)、“English Lady”(15 October 1834)といった作品を模写している。

バイロン作品に基づく版画は、彼の詩やドラマティックな生涯をより具体的に、また美しく表現して見せた。シャーロットはバイロンの作品に傾倒すると同時に、その雰囲気をも自分の初期作品にも持ち込んだ。バイロンの世界を映し出す版画についても同様で、後述するようにシャーロットの初期作品のヒロインたちは、しばしば彼女が模写したこれらの版画の女性たちが人物創造のヒントになったといわれる。

ii) ジョン・マーティン

バイロンとともにブロンテたちが大きな影響を受けたといわれるのが、画家ジョン・マーティンである。ブロンテ家が彼の版画を所有していたことはすでに述べたとおりで、ブランウェルが彼の版画を模写した“Queen Esther”(December 1830)も残っている。

マーティンの絵の多くは直接あるいは間接に聖書から題材を取っており、特に破壊、終末、天変地異、暗黒世界の情景などを表わした作品が大半を占める。峨峨たる岩山や稲妻が走りわたる空、壮麗な大宮殿など遠近法を駆使した彼の絵は非常にドラマティックである。アフリカに都市を築くという壮大なドラマを生み出したブロンテたちが、確かに好んだであろうと思われる画風である。

しかしながら、マーティンの魅力は人目を惹きつける画題だけに止まらない。ブロンテ家もその版画を所有していた《ベルシャザルの饗宴》(‘Belshazzar’s Feast’)を例に取ってみよう。これは旧約聖書の「ダニエル書」のエピソードを基にしたものであるが、マーティンはこの絵を描くにあたって、単に画面上での作業のみならず、その裏づけとなる歴史的な資料を駆使し、舞台となる宮殿の描写やバビロニアにおけるエジプトやインド文明の影響などに関して周到な調査と準備のうえで、細部にわたって入念に描き込んだ。²⁶そのため彼の作品は全体に眺めるだけではなく、細部への「読み込み」にも充分堪える仕上がりとなっているのである。

また、題材を主に聖書から取っていることから、その画面には豊かな物語性があふれている。彼の影響を強く受けた画家や作家は数多いが、なかでも作家に影響を及ぼしたのは、この物語性によると言われる。²⁷シャーロットも紛れもないそうした作家たちの一人で、初期作品のアフリカの都グラス・タウンの描写もマーティンの版画がヒントになっている。

iii) トマス・ビューイク

トマス・ビューイクはイギリスの木版画家で、ほとんどすべての作品を書物の挿絵という形で発表し、それが親しみやすく理解しやすいものであったことから、広くイギリス国内の人気を博した。²⁸ブロンテ家では彼の挿絵の入った*A History of British Birds, volume 1, Containing the History and Description of Land Birds*(Newcastle: T. Bewick; London: Longman & Co., 1816)と、*volume 2, Containing the History and Description of Water Birds*を

持っていた。また、同じくブロンテ家で所有していた別の博物学の本 *The Gardens and Menagerie of the Zoological Society Delineated* でもビューイクは多くの版画のアシスタントをしている。このうちシャーロットが第一巻の *Land Birds* の方から模写した “The Mountain Sparrow” (11 March 1830) などの絵が残っている。

アレグザンダーはビューイクの名前が初期作品にはあまり登場しないと指摘しているが、²⁹シャーロットが彼を忘れてしまっていたわけでないことは、例えば1832年に “Lines on the Celebrated Bewick” という彼によせる詩を書いているし、また何といても『ジェイン・エア』の冒頭で *A History of British Birds* の挿絵について詳しく描写していることから明らかである。

I returned to my book...Bewick's *History of British Birds*:...

The introductory pages connected themselves with the succeeding vignettes, and gave significance to the rock standing up alone in a sea of billow and spray; to the broken boat stranded on a desolate coast; to the cold ghastly moon glancing through bars of cloud at a wreck just sinking....

The fiend pinning down the thief's pack behind him, I passed over quickly: it was an object of terror.³⁰

ここに描かれている挿絵の描写は実際の *A History of British Birds* に忠実なもので、ジェインが語っているのと同じものを見ることができる。これは、単に絵画的な描写というに止まらず、絵画と文学の融合とでもいうべきものかもしれない。



A History of British Birds の挿絵

以上、シャーロットの絵画に対する直接的な影響を与えた主な3人の芸術家について見てきたが、そのほかにもスコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) パーンズ (Robert Burns, 1759-96) キャンベル (Thomas Campbell, 1777-1844) ムア (Thomas Moore, 1779-1852) の挿絵入りの作品集や、シェイクスピア、ミルトン (John Milton, 1608-74) バニヤン (John Bunyan, 1628-88) の本なども彼女に影響を与えたとされている。³¹ また、*Blackwood's Magazine* や *Fraser's Magazine* など、ブロンテたちが定期購読していた当時の雑誌からの影響も忘れてはならないであろう。

シャーロット・ブロンテ自身の作品

シャーロット・ブロンテの絵と文学との関わりを考える際、彼女自身が描きまた作り出した

作品そのものが重要な研究材料であることはいうまでもない。そこから彼女が好んだテーマや両者の共通点、相互の影響関係などを知ることができる。

シャーロットの描いた絵として現存するもっとも古いものは、彼女の手作りの絵本、“There was once a little girl and her name was Ane [sic for Anne]”に付けられた6枚の挿絵である。これは1828年、シャーロットが12歳前後のことである。末妹アンのために、彼女を主人公にした物語を16ページからなる小さな本に綴じている。



“There was once a little girl and her name was Ane”

残されている最初の絵がこのように自作の物語と結びついたものであることは、あたかもシャーロットの絵と文学との強い結びつきを感じさせるように思うが、しかしそれだけで作家としての特質の裏づけとするのは早計であろう。少女ジェインが挿絵がたくさんついていることを確かめてから本を選び取ったように、子どもにとって挿絵は本文同様、いやそれ以上に重要な魅力をもつ部分だからである。ウィリアム・キャルス・ウィルソン(Rev. William Carus Wilson, 1792 - 1859)が書いた、子どもの死や死刑執行などといった陰気なテーマの本でさえ、子ども向けということで挿絵がついていた。³²まだ8歳のアンのために書かれた本に、絵がついていたのは自然なことであつたかもしれない。しかし、シャーロットがかなり早い段階で文字で描いたものを絵と関連させることを知っていた、あるいは関連させながら創作活動を行っていたことを示す証拠であることは確かである。

この小さな絵本の絵を含め、シャーロットが生涯に描いた絵は現在いくつ残っているであろうか。*The art of the Brontës*によると、シャーロットが描いたものとしてこの本に掲載されているものは、全部で184点ある。³³所蔵先の内訳はBrontë Parsonage Museum 148点、個人蔵17点、Pierpont Morgan Library:Bonnell Collection 4点、New York Public Library:Berg Collection 3点、Princeton University Library 2点、Houghton Library, Harvard University 1点、Harvard College Library: Widener Collection 1点、Harry Ransom Humanities Research Center, University of Texas at Austin 1点、そして所在不明7点である。

これらの絵のうち、すでに述べたように、約3分の1が模写作品であるが、なかには初期作品の物語にちなんだ絵も描いており、また模写であってもそれにインスピレーションを受けてそこから物語を創造したりといった、絵と文学とのコラボレーションが行われていたことを示すものも多く残されている。例えば、絵からの関係で見ていくと、1829年7月13日に描かれた“The Keep of the Bridge”はシャーロットが書いた同名の物語の挿絵として描かれたもので、物語の舞台となる橋と櫓が描かれている。そのほかにも“Wellington monument”(January 1831)や“Arthur Adrian Marquis of Douro”(c. 1833)、“Zenobia Marchioness Ellrington”(15 October 1833)、“Alexander Soult”(15 October 1833)、“Alexander Percy”(c. 1833-4)、“King of Angria, Duke of Zamorna”(c. 1834)、“Arthur Wellesley”(c. 1834)など、

物語の登場人物などの名前を冠した、初期作品との直接的なつながりを示すさまざまな絵が描かれている。

また、間接的に物語のヒントとなったと思われる絵もある。絵の描かれた時期と物語の執筆時期、また描かれているものの特徴などから、ラチフォード (Fannie Ratchford) は “Landscape with figure of a lady” (c.1833-5) に描かれている女性像を the Duchess of Zamorna ではないかとしているし、³⁴ジェランは “Woman in leopard fur” (6 October 1839) が Caroline Vernon と、³⁵アレグザンダーは “Portrait of A French Brunette” (14 May 1833) が Lily Hart と、“Young woman with ‘Fairy Legend’” (c.1833-4) が Mary Percy と、“Mr Ph Wood” (c. 1833-4) が Alexander Percy と³⁶それぞれ関連があるのではないかとしている。

次に初期作品の視点から考えてみると、物語のなかには画家を主人公とするものや、絵の批評など絵画に関連する記述がかなりある。例えば、“The Swiss Artist Continued” (10 December 1829) にはアルプスで生まれ育ち優れた絵の才能に恵まれた Alexandre という少年が、パリのルーブル美術館で初めて巨匠たちの作品を目の当たりにして感嘆している場面が描かれている。³⁷ ちなみに、彼が見た作品はミケランジェロ (Michelangelo Buonarroti, 1475-1564)、ラファエロ (Raffaello Santi, 1483-1520)、ティチアーノ (Tiziano Vecelli, 1490-1576)、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452-1519)、ヴァン・ダイク (Anthony Van Dyck, 1599-1641)、フラ・バルトロメオ (Fra Bartolommeo, 1472-1517) のもので、ここで名前の挙げられている 6 人の芸術家はすべて、先に述べた “list of painters whose works I wish to see” として同時期にシャーロットが名前を挙げている画家のリストにも含まれている。

また、1834年5月30日に書かれた “A Peep into a Picture Book” は、語り手の Charles Wellesley が *Tree's Portrait Gallery of the Aristocracy of Africa* という画集を盗み見ている様子を描いたもので、ここにはその画集にある絵が、言葉という媒体によって描き出されている。

The eye follows delighted all those classic lines of face and form: not one unseemly curvature or angle to disturb the general effect of so much refined regularity; all appears carved in ivory. The grossness of flesh and blood will not suit its statuesque exactness and speckles polish. A feeling of fascination comes over me while I gaze on that Phidian nose defined with such beautiful precision; that chin and mouth chiseled to such elaborate perfection; that high, pale forehead, not bald as now, but yet not shadowed with curls, for the clustering hair is parted back, gathers in abundant wreaths on the temples, and leaves the brow free for all the gloom and glory of a mind that has no parallel to play over the expanse of living marble which its absence reveals.³⁸

これはノーサンガーランドの肖像画の描写であるが、顔立ち、体形、髪の毛の様子などが詳しく描かれ、まさに「文字による肖像画」が描き出されている。後半には人相学の影響を窺わせる記述もあり、シャーロットの絵画的な描写法の一例を見ることができる。

以上のような直接絵画に関する言及、また絵画的な描写は、初期作品ばかりでなく後の小説作品のいずれにも見出すことができる。シャーロットの小説の主人公たちはみな絵を描いたり、人の表情を読むことができたり、また自分の人生を画廊に喩えたりする。主人公たちばかりで

はない。登場人物を取り巻く風景が、室内が、またその身に纏う衣服が、つぶさに、あたかも目の前に見えるかのように描き出される。そしてこの絵画的描写力こそが小説家シャーロット・ブロンテの作品の大きな魅力の一つであり、また読む者を惹きつける力なのである。そしてこうした描写力は、絵を描くことと同時進行で生み出された初期作品群を書くことで培われていったのである。

おわりに

アレグザンダーも述べているように、シャーロット・ブロンテの文学作品は、絵画というもう一つの芸術と深く結びつくことで、独自の描写力を獲得している。絵は時に描き手のイマジネーションを具体化する手段であり、またそこから新しい発想が生まれる媒体でもある。シャーロットの場合、初期作品群に見られるように、絵と文学は表現に用いる手段こそ違い、互いに補完しあいながら発達していったもののように思われる。

しかしそこには時代の影響があり、また育った教育環境があり、読みまた触れた芸術作品による感化があり、決してシャーロットがただ一人でたどり着いたスタイルではないことはここで述べた通りである。そうした影響関係を踏まえ、そのうえで彼女がどのように自分の文学の世界を発展させていったのか、またそれがどのように初期作品を初めとする彼女の文学作品に表れ、どのような効果をあげているのか、今後はこれらについて具体的に取り組んで行きたい。

註

- ¹ 杉村藍「ブロンテ姉妹初期作品研究(一)-シャーロット・ブロンテを中心に-」(名古屋女子大学『紀要』第51号、人文・社会編、平成17年3月)pp.1-11。
- ² Christine Alexander and Jane Sellars eds., *The art of the Brontës* (Cambridge University Press, 1995), p. 55-56.
- ³ [George Henry Lewes], an unsigned review, *Fraser's Magazine* (December 1847). ここでルイスは『ジェイン・エア』における自然や家、室内、家具などの描写に関して“The pictures stand out distinctly before you: they are pictures, and not mere bits of ‘fine writing’...”と述べ、作者の描写力を単なる書き物を超えた絵画に喩えている。
- ⁴ An unsigned review, *Spectator*, (6 November 1847).
- ⁵ [A. W. Fonblanque], an unsigned review, *Examiner* (27 November 1847).
- ⁶ [Elizabeth Rigby], an unsigned review, *Quarterly Review* (December 1848).
- ⁷ Philaëte Chasles, *Revue des Deux Mondes* (1 March 1849).
- ⁸ 例えば、初期のころに評価されていた高い宗教観や道徳観などは20世紀に入るとむしろ否定する批評が相次いだ。20世紀後半、ディヴィッド・セシル(David Cecil)は*Early Victorian Novelists* (Constable & Company Limited, 1964)のなかで、作家としてのシャーロット・ブロンテに関して非常に厳しい批評を展開しつつも、彼女の文章が小説の効果を上げるうえで強力な媒体であったことを認めている。また、ウィンフレッド・ジェラン(Winifred Gerin)は“Her [Charlotte's] greatest quality as a writer would ultimately be in the visual power of her descriptions”と述べ、作家としてのシャーロットの資質が視覚的な描写力にあるとしている。(Gerin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*, Oxford University Press, 1967, p. 42) 日本でも中岡洋氏が“Charlotte tried to express her ideas and emotions in two ways of art; painting and literature”とシャーロットが表現手段として絵と文学の二つの方法を用いようとしていた述べ、二つの表現方法の密接な関係を示唆している。(Hiroshi Nakaoka, “Romanticism in Charlotte Brontë's Imagination”, 『中心と円周』 桐原書店、1995年、p. 670)。
- ⁹ 高山宏「十九世紀美術を映しだす鏡 ブロンテ姉妹と絵」 河野多恵子、中岡洋他著『「ジェイン・エア」と「嵐が丘」 ブロンテ姉妹の世界』(河出書房新社、1996年) p. 95。
- ¹⁰ シャーロット自身、骨相学に興味があり、1851年、実際に骨相学者を訪ねて診断を受けたことが知られてい

- る。
- ¹¹ ピーター・コンラッド著、加藤光也訳『ヴィクトリア朝の宝部屋』(国書刊行会、1997年) p.86, 92.
- ¹² 高山宏、p.91.
- ¹³ Alexander and Sellars, p.10.
- ¹⁴ *Ibid.*, p.50.
- ¹⁵ *Ibid.*, p.38.
- ¹⁶ 高山宏、p.91.
- ¹⁷ 司祭館にあった3枚のマーティンの版画は、'Belshazzar's Feast'(1826 and 1832), 'Joshua Commanding the Sun to stand still'(1827)そして'The Deluge'(1828)である。
- ¹⁸ "Nineteenth-Century British & American Literary Annuals" <http://www.sc.edu/library/spcoll/britlit/litann.html>.
- ¹⁹ Gerin, pp.41-2.
- ²⁰ ハワースが文明から遠く孤絶した寒村というイメージは、シャーロットの伝記*The Life of Charlotte Brontë* (1857)を執筆したギaskell夫人(Elizabeth Gaskell, 1810-65)に主に由来する。*The Brontës*(London: Weidenfeld and Nicolson, 1994)によってブロンテ家の人々の生涯を再検証したJuliet Barkerによると、ギaskellのハワースに関する記述はブロンテたちより100年も前の時代に基づいているという。当時の地元紙を調べると、実際のハワースはウェスト・ライディングのほかの"industrial towns"と何ら変わるところがなかった。ヨーロッパ大陸からオーケストラが渡英、演奏会を催すこともあり、ギaskellの描き出す僻村とはほど遠い。Barkerは、シャーロットに向けられていた非難を彼女が育った環境のせいにする事で彼女を救おうと、ギaskellが敢えてハワースをこのように描き出したと考えている(Juliet Barker, Lecture. Brontë Parsonage Museum, 30 August 2005)。ギaskellの動機については議論の余地があるかもしれないが、しかしこれまで考えられていた以上にハワースが中央の文化とも交流があったとすると、なおさらシャーロットの絵や絵画教育について積極的に時代との関連で考える必要があるであろう。
- ²¹ Charlotte Brontë's letter to the Revd. Patrick Brontë, 23 September 1829.
- ²² Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, (London: John Murray, 1920), pp.102-3.
- ²³ *Ibid.*, p.87.
- ²⁴ Alexander, and Sellars p.52.
- ²⁵ Charlotte Brontë's letter to Ellen Nussey, 4 July 1834.
- ²⁶ 解説・監修:大瀧啓裕『ジョン・マーティン画集』(発行:トレヴィル、1995年)pp.91-2。ちなみに、マーティンはこうした綿密な調査に基づいた作品鑑賞の手引きのようなパンフレットもたびたび作成しており、この《ベルシャザルの饗宴》がその最初の例という。
- ²⁷ 前掲書、p.99。
- ²⁸ 平田家就『ビューイックの木版画』(研究社出版、昭和58年)、p.10。
- ²⁹ Alexander and Sellars, p.22.
- ³⁰ Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Jane Jack and Margaret Smith eds. (Oxford at the Clarendon Press, 1975), pp.4-5.
- ³¹ Alexander and Sellars, p.16, p.54.
- ³² Barker, p.136.
- ³³ 「22a」のような枝番号も独立した1作品としてカウントする。また、この本のなかで新たにシャーロットの作と判定されたものも含む。
- ³⁴ Fannie Ratchford, *The Brontës' Web of Childhood*(New York: Columbia University Press, 1941), p.124.
- ³⁵ Gerin, *Five Novelettes* (London: The Folio Press, 1971), opp. p. 321.
- ³⁶ Alexander and Sellars, p.212, p.219, p.220.
- ³⁷ Charlotte Brontë, "The Swiss Artist Continued"(10 December 1829), Christine Alexander ed., *An Edition of The Early Writings of Charlotte Brontë 1826-1832* (Oxford: Basil Blackwell for the Shakespeare Head Press, 1987), p.116.
- ³⁸ Charlotte Brontë, "A Peep Into A Picture Book"(30 May 1834), Christine Alexander ed., *An Edition of The Early Writings of Charlotte Brontë 1834-1835* (Oxford: Basil Blackwell for the Shakespeare Head Press, 1991), pp.86-7.